「潜在的輿論」と私的感情

――清水幾太郎と戦間期「社会心理学」――

東京大学　品治 佑吉

1　目的

近年，新聞・テレビといったマスメディアの形成過程の分析を中心的な関心としてきたメディア史理解を再検討する試みが進んでいる．その中で着目を集めているのが，『流言蜚語』を始めとする社会学者・清水幾太郎（1907-1988）の著作群である．近年出版された戦間期の世論研究史においても，清水は世論形成過程におけるパーソナルな接触の意義に着目した先駆的な論者として取り上げられている（Schäfer 2012）．

しかしながら，これまでの研究では，清水の議論から当時の言論統制に対する批判や，マスメディア批判としての側面を読み取る視点が先行し，清水がなぜパーソナルな接触の過程が重要だと論じているのか，彼自身の学問的視座に即して議論する作業が十分になされていない．本発表では，戦前期の清水の著作の読解を通じて，この点を明らかにすることを目的とする．

2　方法

本発表が着目するのは，清水が 1930 年代に展開していた，感情の生成に関する社会学的な分析である．1930 年初頭以降に清水が発表してきた論文・著作の中で，世論やジャーナリズムといった主題それ自体が決して大きな位置付けを与えられているわけではない．むしろ清水が論じていたのは，人間のパーソナリティ形成の過程に対して，社会的な矛盾や利害対立がいかに影響をあたえているかという点なのである．

本発表では，そうした視点の現われた清水の議論，とりわけ太平洋戦争開戦直前の著作（清水 1940; 1941）に焦点を当て，清水がいかなる先行研究を参照し，議論を行っているかを検討する．

3　結果

その結果，清水が当時において「社会心理学」と概括されていた動向を参照しつつ，人間のパーソナリティ形成の過程を，社会的な矛盾や利害対立が個別化し，潜在化する過程として捉えていたことが明らかになった．清水は，流言蜚語の内部の個々の要素に反映される個々人の人格や感情に見られる微細な差異のなかに，重要な社会的な矛盾や利害対立が反映されていると捉えている。その点に，清水が微細な感情の差異が顕在化するパーソナルな接触の領域に着目していた一つの動機を求めることができる．

4　結論

以上より，戦前の清水の議論の先駆的意義を，言論統制との対立からでも，マスメディアの構造的な変容との関係からでもなく，感情の社会学的分析として呼ぶべき理論的視座に認めることができる．

文献

Schäfer, Fabian, 2012, *Public Opinion, Propaganda, Ideology: Theories on the Press and its Social Function in Interwar Japan, 1918-1937*, Leiden: Brill.

清水幾太郎，1940,『社会的人間論』河出書房.

_____，1941,「競闘」岩波茂雄編『岩波講座 倫理学 第十五冊』岩波書店.